

## 天児慧先生とアジア地域統合研究・GIARI

黒田 一 雄 (早稲田大学アジア太平洋研究科教授)

天児慧先生は日本を代表する中国研究者である。中国の政治史・現代政治に関する数多くの著作をものし、早稲田大学現代中国研究所所長や人間文化研究機構の現代中国地域研究総括代表も務められ、日本における中国研究の推進に、指導者として多大なる業績を残された。しかし、私はここで隣接領域ではあるが、別の領域である「アジア地域統合」に関する教育研究における天児先生のご貢献、その創始者としての業績を記したい。

早稲田大学は20世紀の終わりになって、「アジア太平洋地域における知の共創」を大学の基本理念として掲げ、その一つの結実として1998年に「大学院アジア太平洋研究科」を独立研究科として設立した。2002年には、文部科学省の21世紀COEに「現代アジア学の創生」プログラム(毛里和子代表)が採択され、2007年までの5年間にわたって、政治経済学術院とアジア太平洋研究科が中心となってアジア地域研究を推進した。2005年に初めての東アジアサミットが開始されるなどの国際社会の状況を反映して、この21世紀COEプログラムの後半では、特にアジア地域統合をテーマに研究が展開された。天児先生は、このプログラムにおいても中心的な役割を果たされ、この研究成果の集大成として編まれた「東アジア共同体の構築」シリーズ(岩波書店)の第1巻「新たな地域形成」の共編者を務めている。

2007年には上記21世紀COEを引き続く形で開始された文部科学省グローバルCOEプログラムに、アジア太平洋研究科は「アジア地域統合のための世界的人材育成拠点」(GIARI: Global Institute for Asian Regional Integration)を天児先生が代表となって申請し採択され、2012年までの5年間、アジア地域統合に関する多様な研究・教育活動が展開された。この拠点の運営に当たっては、副代表を浦田秀次郎先生と松岡俊二先生が、事務局長を後に東大に転出された園田茂人先生(園田先生転出後は黒田)が務め、代表たる天児先生のイニシアチブの下、30名を超える学内外の教員が、アジア地域統合研究の考究と、大学院レベルの教育体制の構築に尽力した。

思えば、楽しい5年間であった。天児先生の暖かい人格と「あけっぴろげ」な性格は私たち教員だけでなく参加する博士学生たちをも和ませ、先生の学問研究への真摯な態度と常なる問いかけは私たちのこの分野の研究への知的好奇心を大いに刺激した。天児先生は、GIARIを通じて、アジア地域統合という新しい研究分野における生産的な知的コミュニティを創造することに成功したのである。結果、この拠点に集った若手研究者・博士学生の多くが業績・学位を得て、日本・アジアを代表する様々な大学で教職に就き、活躍している。この拠点の研究成果は『アジア連合への道—理論と人材育成の構想』(天児慧著、筑摩書房、2010年)に始まり、その集大成は、岩波書店『アジア地域統合講座』(編集代表 天児慧)全12巻、及びSatoshi Amako, Shunji Matsuoka and Kenji Horiuchi (eds.) *Regional Integration in East Asia—Theoretical and Historical Perspectives* (United Nations University Press, Mar. 2013)として刊行された。

天児先生の構想したアジア地域統合のための研究教育拠点の形成という夢は、今も早稲田大学とアジア太平洋研究科に引き継がれている。GIARIの終了後、アジア太平洋研究科は、文部科学省の「大学の世界展開力強化事業」に「アジア地域統合のための東アジア大学院拠点形成構想」を申請し、採択され、北京大学、高麗大学等のアジアの主要大学と協力しながら、アジア地域統合のための教育研究プログラムを展開してきた。アジア太平洋研究科では、アジア地域統合・地域協力をテーマとした国費留学生の優先配置枠も継続的に獲得してきている。2017年には早稲田大学における文部科学省スーパーグローバル大学創成支援事業の一貫として、グローバルアジア研究拠点が、GIARIの主要メンバーだった梅森直之先生のイニシアチブで立ち上がった。

早稲田大学の校歌には「集まり散じて人は変われど、仰ぐは同じき理想の光」とある。以前私はこれを学生のことを表しているのだと思っていたが、最近教員も同じだと気がついた。天児先生は、個人の研究者として卓越した業績を、日本の学术界、そして早稲田大学に残された。しかし、天児先生が私たち後輩研究者や学生に残していったものは、研究業績としてはカウントされ得ない温かい人のつながりや、しみじみとした学問研究への愛しみといったものであったと思う。そして何よりも、天児先生はアジアの平和と協働を担うという高貴な志、アジア地域統合の「理想の光」を私たちに託された。そうした天児イズムを胸に抱きながら、私は、今後の早稲田大学での研究・教育に取り組んでいきたい、と願っている。